

No. 140

モラロジー教育

ニューモラル教育の実践

(特集) 道德の教科化に向けて

【主な記事】

- ◎生命の継承・発展と道德教育 北川治男
- ◎「特別の教科 道德」における授業の改善・充実を目指して 谷田増幸
- ◎道德的知識・道德的判断・道德的意志決定の構造 諏訪内敬司
- ◎道德指導資料No.86 「わたしの名前」
・同資料を使った授業実践事例 小齋平洋
- ◎ピア・サポート・トレーニング① 山口権治
- ◎品性を基盤とした「学力」の育成 大和多聡宏
- ◎第52回教育者研究会開催予定

編集・発行 公益財団法人モラロジー研究所
生涯学習本部 地方活動支援室 教育者担当

〒277-8654 千葉県柏市光ヶ丘2丁目1番1号
電話 04-7173-3219 ファックス 04-7176-1177



「道德」とは何か、教師の課題とは何か

麗澤大学学長 中山 理

まず最初に、どうして道德教育を行うのかという根本的な問題を取り上げてみたいと思う。一般に道德と言えば、家庭や小中学校で行うものであり、高等教育の中に位置づけるものではないという意見をよく耳にする。しかし、道德はそのような初等教育レベルに留まるものではなく、「自己と他者とのよりよき関係性」の構築という、もっと広い視野で捉えるべきものだと考える。自己と他者との関係性を考えながら、いかに生きるべきかを学ぶことには、特に時期が決められているわけではない。そのような関係性は、環境や年齢が変わるたびに新しく組み替えられ、それに対応する新しい道德的心構えや態度が必要である。端的に言えば、道德の学びは、時期を特定せず、生涯続けるべき課題なのである。

つぎに、現代はグローバル時代と言われるが、そのような時代が要請するグローバル人材に共通して求められる要件は何だろうか。誰でも挙げるのが英語力に代表されるグローバル・リテラシーであろう。しかし、それは必要条件であっても十分条件ではない。それとともに最近「社会人基礎力」が取り上げられることもあるが、たとえばその中の「前に踏み出す力」（一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力）だけを見ても、この能力をつけるためには、失敗そのものを「自己を向上させる恩寵的試練」と捉える道德的発想が必要であろう。要するに、グローバル人材の養成も道德教育なしには成り立たないのである。

その道德教育のカギを握るのが、他ならぬ私たち教師である。トマス・リコーナ博士の言葉、「学生の人格にインパクトを与える上であなたが持っている唯一最強のツールは、あなた自身の人格である」を心に刻みたいと思う。



品性を基盤とした「学力」の育成

学校法人 大多和学園
開星中学・高等学校 理事長・校長

大多和 聡宏

本学園は、大正十三（一九二四）

年に「松江ミシン裁縫女学院」として開校しました。まだ和裁が中心だった時代に、洋裁を教えるという先を見て先に行う教育（先見教育・先行教育）と、女性の社会参加が珍しい時代に、家庭人としてはもちろん、一人の人間としての品性を磨く道徳教育を二本柱として、本学園はスタートしました。

大正、昭和、平成と歴史の変遷の中で存続発展してこられたのは、「建学の精神」を大切にしてきたからだと思えます。女子校から共学校へ、家庭科中心の教育課程から普通科の教育課程へ変容を遂げ、今日を迎えています。この九十二年間、本学園の教育理念は不変です。

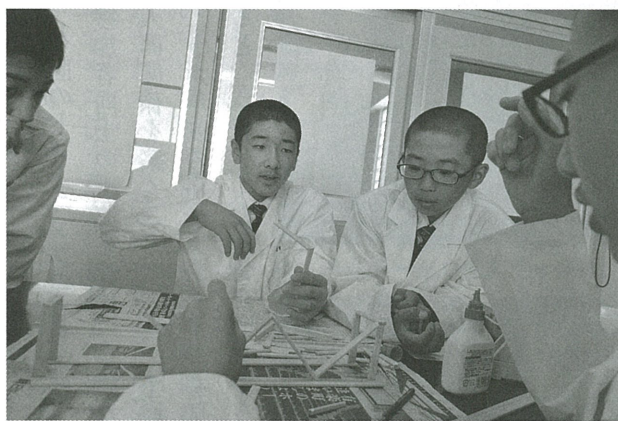
冒頭述べましたように「先見教育・先行教育」を大切にしています。そのためには、物事の本質や時代の流れを読み、不易と流行（変わら

ないものと変わるもの）を見極める必要があります。

最近の中央教育審議会（中教審）の諮問や答申を参考に、これからの時代を考えてみます。まず、昨年（平成二十六年）十一月、中教審に小中高校の学習指導要領の改訂が諮問されました。通常より一年前倒しの諮問です。そして、従来は、学習内容の見直しが中心ですが、

今回は、指導方法にまで踏み込む内容になっていきます。一方、昨年十二月には中教審の二つの答申が出ました。その一つは、高校教育、大学教育、そして大学入試、この三つを一体的に改革するためのものです。

答申の冒頭で、次のように書かれています。「世の中の流れは人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。そうした変化の中で、これまでと同じ教育を



続けていくだけでは、これからの時代に通用する子供たちに育むことはできない」と述べられており、かなりの大胆な表現になっています。

ここで、「将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い」という根拠として、キャシー・デビッドソン氏（アメリカの大学教授）の予測、すなわち、二〇一一年に小学校に入学した子供たちの六十五％は、大学卒業後、今は存在していない職業に就くだろうという予測を引用しています。

この予測は、アメリカに限らず、

世界各地で波紋を呼びました。実際に現在の日本でも、企業がイノベーションによって新しい職業が生まれ、既存の専門職を置き換えています。

一方、現在の教育は、十九世紀末から基本的構造は変わっていません。大学で専門家を養成することを頂点として、必要な知識や技能を小学校から段階的に積み上げていくという仕組みです。しかし、職業が安定したものでなくなれば、教育のシステムも大きな変化を迫られることとなります。前述の答申は、まさにこの問題意識がベースになっていると思えます。

現在、国内外のさまざまな団体が二十一世紀に生きていく子供たちに必要な「一般的能力を整理し」、「二十一世紀型スキル」と呼ばれるものを定義しています。これらは、今は存在しない職業に適した教育とは、どういう能力を育成すべきかを検討したものです。

本校では、こうした「二十一世紀型スキル」を参考し、また本校の「建学の精神」である「品性の向上を図り、社会の発展に役立つ

有望な人材を育成する」という教育理念の今日的な位置づけを明確にするために、昨年、本校が育成する「学力」を定義しました。

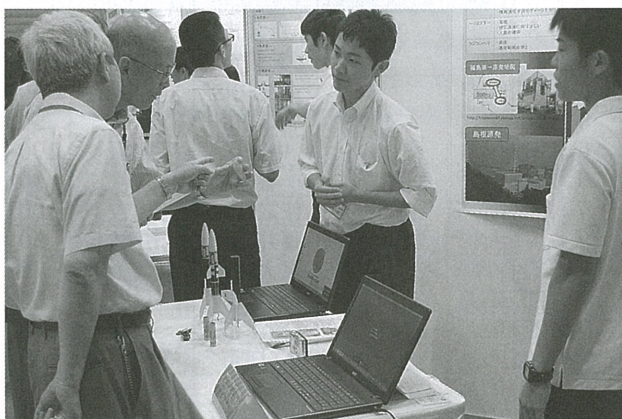
建学の精神に掲げている「品性の向上を図る」とは、道徳性を重視し、『よりよく生きる力』という人間力を育成することです。また、同じく建学の精神に掲げている「社会の発展に役立つ有望な人材」とは、現代社会における諸課題を発見し、その解決に至る道筋を考え、自ら行動できる能力を身に付けた人材と考えます。『よりよく生きる力』を育成することは、こうした現代社会に求められている能力をもった人材の輩出にも結びつきます。

本校では、モラロジーの教育観を基本に置き、次のような考え方をしています。品性とは善を生む根本的な能力であり、知情意をはじめ、その他の諸能力に働きかけ、私たちの『よりよく生きる力』を発揮させます。その第一は『つくる力』、すなわち創造力です。私たちに与えられた能力をよく生かし、日々の仕事に励んだり、課題を解決する意思や知恵を生み、人生を

開拓する力です。

第二は『つながる力』、すなわち共生力です。自然や神仏など人間をこえた存在と心をつなげる力、人を思いやり、助ける力、人と親密に交わる力、人と協力して集団の力を発揮させる力も品性によって与えられます。

第三は『もちこたえる力』、すなわち忍耐力です。私たちは、人生の途上でさまざまな出来事に出会い、いろいろな困難や危機を経験します。そうした課題や危機に直面して、粘り強く対応しながら、



もてる力を十分に発揮させる根本が品性です。

そこで、本校が育成する「学力」を定義する際も、『よりよく生きる力』を構成する三つの力、『つくる力(創造力)』『つながる力(共生力)』『もちこたえる力(忍耐力)』に基づいて決めました。

『つくる力(創造力)』の育成とは、物事を思考する際に、ロジカルシンキングやクリティカルシンキングといった深い洞察性を持つと共に、考えたことを実行に移す決断力を兼ね備えるように育てることです。

『つながる力(共生力)』の育成とは、対等な立場で、誰とでも話し合ったり、協力して働くことができるための言語力やプレゼンテーション能力を持って、リーダーシップが発揮できるように育てることです。

『もちこたえる力(忍耐力)』の育成とは、規律性を核とする自己管理能力であり、計画性のある学習をすると共に、失敗も含め、経験を反復することによって環境に適応した行動を習得できるように

育てることです。

本校は、平成二十五年度より文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けています。その研究開発課題は、「道徳観を備えた科学系人材を育成する中高一貫教育課程の開発」です。現在、SSHの指定校は全国で二百校余りありますが、研究開発課題に「道徳」を掲げているのは、本校のみです。知育と徳育の融合は、「言うは易し、行うは難し」ですが、試行錯誤しながら取り組んでいるところです。

日本の将来を考えた時、国際的に活躍しうる科学系人材の育成は喫緊の課題ですが、同時に高い志や公共心をもった若者を輩出することも、極めて重要であると考えます。その際、道徳教育を基盤として人格(人間性)を高めることが、人材育成の要諦であることをより多くの関係者に理解していただけるように、本学園のSSHをはじめとする教育実践をさらに推進していきます。

